

朝夷巡嶋記

第五編

卷三

春

庫書	103
ノ	50
	169
188	號番
40	數冊



13
3093
23



諸兄と申すは、此書を以て傳へば、
 其の功は、馬琴の地ト云
 けの、本、子、を、満、是、は、
 む、だ、が、と、申、す、は、
 申、す、は、

布衣の馬康のさえ
 た、師、

昭和九年
 七月三日
 成末

朝夷巡嶋記全傳第五編卷之三



東都 曲亭主人編輯
 孝友の七命人
 新参の老實僕

吉田屋

吉見冠者義邦八曩、在柄平太胤長、抑苗、其、小袋坂の守屋あり、夫婦
 主後、徳、主、七、人、日、夜、番、卒、ま、う、ち、守、ら、れ、相、彈、慰、さ、る、が、も、あ、ら、な、か、く、西、三、日、を、送、り、
 程、外、面、忽、地、騷、く、只、今、而、教、書、到、来、せ、し、と、て、雜、兵、の、罵、る、声、遙、く、空、を、穿、つ、
 原、来、ま、う、へ、あ、ら、し、と、主、後、耳、を、側、て、く、安、ん、ぬ、宵、の、中、小、時、運、と、天、下、任、り、
 必、死、の、覚、期、今、は、く、驟、と、氣、色、い、わ、り、ま、し、且、く、要、拘、入、胤、長、公、戎、衣、を、解、て、礼、服、
 更、り、通、の、書、翰、を、懐、中、に、之、義、邦、の、ほ、ろ、う、ま、あ、ら、し、と、い、ふ、只、今、云、云、の、下、知、事、
 便、是、和、殿、夫、婦、ハ、知、り、又、胤、長、預、り、之、在、柄、の、宿、所、に、召、置、與、し、と、仰、り、江、三、二、小、

月見五編卷三

草書 五 終 卷 三

四回の後者はその名をえらるゝめかれは冠者と共召措べし但蒙二郎は夏
苟且は陸奥より後ひきつるものありし豫てその父をわが家臣の四人と注し
かれは蒙二郎の限りよりわが故郷へ歸去せんともわがこの地を在んずる彼男
随意の志し附之又下知あり朝走三郎義秀より既に上聞は達せし則
渠を徴せん為し和田新左衛門尉常盛を越中國へ遣はるれば件の義秀は
果して義盛の子である常盛は弟かれをも離別幼稚の時かれを送る面
忘れあつらんより江三廣光と常盛は俱く彼地へ遣せられたるは序を
りて義邦私に義秀へ一翰を贈るとも安否を問はん為のそがくは智謀死
すふわが心と評定衆あり傳はれらるゝるの急せあわわん常盛の朝
啓行せしむるの準備肝要之又多賀藏人の禁獄を免されし和田義盛に領
られし既その風聞あり藏人をかかぬの如く況冠者の犯禁罪のわりともはる

ちん疑ひ稍解か本領安堵の日もわが後懸しと懇に告慰めり懐かせし
御教書を恭しくも披読し声爽は續受され義邦は果て額つる頭と僅
仰謹て承りゆひの嫌疑の中よりを置はつる罪をゆるん彼と安堵をわがうに
假深から両三日浅くは物せられ貴所の領りとなりしとあひひか死幸ひに某
の之飲藏人の朝夷氏の親族の方より召籠らるゝは是れ不思議の因縁
いんや亦越中へのわん使は廣光を俱せられ郷導するんす歎び譬ふ物なり
彼義秀の恩人の越路へかかぬ鷹の翅は一封の書を寄せよと秋許せぬ恩
命の有らぬ死を辱し望足りぬとわが答ふと胤長はさうち點頭するが
宿所へ相伴し後者の揃ふ程はわが物々整へらるゝと心どつてわが番
卒亦とも皆退しし側人のともはわが當下義邦の菴姫共侶は廣光の恩
武詮昌之蒙二郎と近づく密せし相儀あり意外はゆる恩命を疑ひ

月 五 編 卷 三

可
長
一

小袋坂の
新医胤長
武余を傳へ

月
五
編
卷
三



たの
長



城戸
四郎

よ一
邦

廣
光

水
管
大
師
平

車
良
三
巻
三

ちやう小あつねどもが身ハ初召菟らるる廣光との故免しく越路への
 案内せられ且朝夷へ書状を贈ると命せられありぬさ。あつねの
 申んと同れて廣光頭を傾けその故詳はあつねにかければ冠者ハ
 申智の
 知れハを既そ番卒ハ退たれ況越路へ御導は某を俱せし願
 ぬる幸ハ只朝夷の御被箱向判五去歳よりと浅良井と小三三
 鯛への折を以て彼処よりめを謝と述べし主後の誠心と憐れ
 冥助ハをいれり人の武詮声と細めて否然とありて三三を越路へ遣
 さらしその面を認めざる常盛の擇人ハ似たり又朝夷ハ贈れ
 許されハ朋友の義と重くとひある彼人遂は推辞となく敬
 ありそその支面ハ私の義と述べし只一行ハ安否を訊ねる
 ありそ其の支面ハ私の義と述べし只一行ハ安否を訊ねるその東行と執
 ありそ其の支面ハ私の義と述べし只一行ハ安否を訊ねるその東行と執
 ありそ其の支面ハ私の義と述べし只一行ハ安否を訊ねるその東行と執

多賀の冠者ハ若神ハ朝夷ハ招れども夜は
 継ぐこの地は其のべしかき彼人召されし柳營は仕へ
 譬ハ尾羽を披れ鳥の再び翼を生じ如く又これハ助也
 眞実とて密語ハ義邦悉く領たて四郎が考その理ハ稱
 是之れハ廣光昌之歎びく四郎ハその才兄ハ似れハ
 違ふはたこれ吾黨の馬白眉汝を愛しとを稱多
 了は面色やう人々の背より義邦を傷近つけ
 附驥の幸ありく父の本領三がひも
 ありそ其の支面ハ私の義と述べし只一行ハ安否を訊ねるその東行と執

挾社鹿の二二ホ四人の耳を傾けて頻に感嘆ありたり中義邦の
 感涙坐す禁るも心を目皮をたぐひて通徹妙に蒙三郎初日家に行
 比のまろりふも多るがうくふ家の艱は忠孝願れ雪の中は松柏の操を
 このまろり現この弟中七彼兄あり匹夫も志を奪ふべしあつた望も
 せんは此の地は足を駐る可惜路銭を費はし兄弟遭はれその益を吾
 為中絶えぬはたともかとも舊里へ入るとは決むる要は鎌倉を見
 送りしるまろり武藏の太田の莊に赴け光仲の内室と交する且見
 姫を慰むる彼婦人の薄命の親廣綱は捐らるる良人の不測の罪を
 ゆり老黨間中守直八先へ還るといふも營中の沙汰定むる風聞
 紛紜しん中を愁傷さると想像すべしあつたその良人の留守も毫と
 訪はしるも面をたぐひて蒙三郎の女どもこれが消息をて彼地は到らば

豫て相識る守直あり心をたぐひておもく歡びて泊りぬ故彼処身を寓
 且見姫の資とけり六が夫婦の龍居は後人あり遙に勝るる護はれ
 めを問はて姫の歡げはよくあつたつせぬ世は類に憂る夫のやに
 侍りてそ猶慰さるるわかれ幸は人の幸を女も増させぬは彼方
 此痛ありと對面せしむる間中集入が噂しそ名をいふは
 ともかくも計らせると回答は廣光ホ四人も共感佩しく安危の巷に在る
 朋友の美を敷くはの留守も訪せしむる忠操ありて現蒙三郎
 相恋したる使をの辞はしよともそのつれは蒙三郎ハ初日は先と
 善夜之鎌倉を日を送るる在柄の弟は赴け冠者は見参るるわ何
 地子ありと定ぬ兄穂之助は遭人とをゆく難はるるは仰は後ひ
 ありと太田の莊に三十里のありて下野に在るありて鎌倉の風聞

彼地へいそぐはえん陸奥之宿志と遂も朝夷討と多賀殿と内外ありて我
 柵を攻落しやる。この両将の賜められしや越路へは邁依く太田の莊赴くとも
 恩を答ふ志はれり道も荒れど是れが主命のゆかぬが秘本意も協へり然
 消息を急せ免と愉く承引く遠く退却料紙硯を借りて去る塵埃を吹く
 贈りしはむと墨磨りて走書あるが程は義邦も亦一通守貞
 蒙三郎はこれと遮与りて加口状を云云とありぬは打りおれ迎の轎子来り
 とぞ荏柄が家隸業内と布の幔幕引絞りせ免と促せ義邦脱て身と
 起して蓮姫共伴は縁頼は立止しが轎夫が擡まは二挺轎子嚴重は縣の土
 卒立聚會て或は義邦と蓮姫を扶乘し或は廣光從忠武詮昌之ホとら獲て
 前駆後後の隊伍正しく荏柄天神のほりある第宅を抜く秘のせは胤長は

後者多く抑く馬上ゆるし拍せり。かゝる殿を押しふるされば又下知を受く
 加内首れる雑兵は城戸を解け守屋を毀く新園を廢られぬこの名あり
 人の往返も常のどくまかりさる程は蒙三郎ハ恍惚とて追立れば依ことと
 離別は堪はぬ加内その故主の轎子の後を跟れ又傷まれば追遣られもさ次
 おも邁とみかす其処ともゆるぬ荏柄の社頭まで来るれば前面ハ胤長は
 門の守の緊しく。これれ内へ入れ後又今頃は朽とくも懐惆とく
 立在程は長次夏の日もあさる常よりそく黄昏く林かかる鴉をんてん
 あふはあふがれが今宵ハ小町のほりぬ客店を宿投りのあや且く進首く
 荏柄の社に詣り義邦の妻異と初く胤長が宅地の邊を徘徊し又若宮菴路を
 和田義盛の茅を觀り市中の風聞を撈り荏柄平丸胤長ハ和田氏の煎流
 ちとく義盛の後弟をその第ハ柳宮の東荏柄の前面をく時の人異村と荏柄

平太と喚做う和義盛の祖父を義明との三浦大介是なり義明の嫡子と和由
 太郎義宗と云是則義盛の父之義宗の季弟也和由平内義長と云義長の家
 男八則平太胤長之胤長其の性名を好む客を愛ひて大く知文藝おほし
 武術其世の鳥傑と云ふ身之樂まきまらば圖の吉見主従と領けられと
 面目より其の款待は意を用ひて守禦の士卒を遠く坐らしめ躬屈かぬ
 中にあり又光仲を領けられる和由左衛門尉義盛は當時鎌倉宿老の功臣は
 あり侍所の別當なり其の性親戚を敦く人々の善を稱へ弱を助け利の
 為より又の惜み識量明なり決断は疎くさざり光仲が罪戾は皆是
 実なり評告知んとし我も及ば最命己とをいふこれを宿所は召籠えん
 罪人を執扱せんと東面を福房は光仲を安措ふそのほろ大魁つげん
 家録を成と成其某甲と云ふ老女人と男童二人を果らせその所要と達す

光仲の文武の才長なり大功のむすを憐れ且も子義秀と云
 浅くはせけり又義盛の嫡子常盛は義秀を徵聘の使とて五月
 廿四日の朝未明は老黨腰越六郎小後者多おと且郷導の為江三廣光を
 相携越中國婦負郡若神の郷民稲向判五が宿所を投て起りたり
 廣光ハ廿三日の甲夜の間に義秀を届えに義邦の書翰を受収む在柄か私卒
 護送れて和由の第へ赴りて常盛就て對面し郷導の事を尋ねられ
 光仲は召籠られぬれ室はありともいふ人同念にあり懐ひを臥
 房の紙障又房籠の伊与簾は隔られ次日越路へ赴りて草三郎ハ
 これの風聞を彼に問ひ此はまじく僅し心を要くし遂は鎌倉を立ちて武藏の
 太田へ急行す五月廿九日の日も未下判既は件の里は本々人同念に隠れ
 ぬ廣綱の莊院を衡門を向れば甲門の扉銷固く角門の些開り時夏

最中の中は母屋の端の障子文開籠る内久影ありともおぼえに進入て又
 なるも川も拂ぬ夏草の彼此は生糸なる樹上は高き蟬の声をあはれ
 熱き見の水の濁り立ち立んと欲されば檐下は垂る蜘蛛の網を包れ
 うの驚き退け六樹垣より促徹のこくと飛ぶを拂ひあはれ二ツ
 三飲を肩集りあはれ宿の宿はあはれ荒く守る人の心の中は
 かんと思像が胃塞りくうむ鼻の音や洩る内より人の誰と智めく
 障子と碯とむくのは是則別人の間に中集人守直の衝とあはれ
 藁二郎と面とあはれあはれの小飲び又疑ひあはれと答れ
 藁二郎の邊く式臺とあはれ板縁よりあはれ声を細く其は只むく
 詣あはれとむく訝しくあはれこの種々の情由ありく冠者の使は立れ
 消息も齎しあはれあはれなる多たあはれあはれあはれは端近しあはれ守直とあはれ

ゆへ何の秋の夕暮とあはれあはれあはれ且と誘へば藁二郎草鞋と
 片と累と笠とあはれ被せ端折し単衣を引あはれあはれあはれあはれ
 流る汗を拭ひあはれあはれあはれと小曹を折り引れと客房に赴け窓の下
 坐を占れば守直も對ひとあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 安否を答へ杖光仲の夏之趣及義邦主校の義秀の風聞高利高吉の
 あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 さよあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 折れあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 文面は和主のうさ曲を載せられあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 多くあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 あり先へ告げあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

大田の莊
且見の訪

月夜五編



間中



朝日五編

おと

多賀殿の武功帰陣のよし見姫は報せし歡び多きなり。已
 べにわづれが前司殿の世をゆり捨て往方もあはれなり。すの趣を
 ありし七像見の三種を進ませし姫は果に死色の變をもあはれ
 泣き涙ハ袖よりそぐ外はあぬ驟雨は宵ハ板屋の破廂あふ堪
 悔の八千六百十遍の泣き泣きハ涙より咳あけて衣引被た臥し
 現見歎死の理りの襦袢の中より大殿の養ひし廿年以來実の親も
 異なりぬ恩愛の羈絆を断れし惜みの深きも只孝心の切多し
 工をありし去歲の冬ハ菖蒲の尾の病を世を逝せし今茲父
 大殿は捨れぬひあの方の中を量りて慰めあはれぬを
 臂近く使し校枝の女子などこれ彼諫めたり一日二日と往
 風定まるとも多賀殿ハ云云の事ありその罪輕くぬれむ
 在柄氏

仁田氏台命を奉り小袋坂は出逆へか念地は搦捕りぬ吉見殿
 筒様と報知らるるなり。其軍役は後々彼新聞より追還され
 里人れが紛れあはるるなり。且見姫ハ大殿の死往方と
 宵のうら雲霧もあはれなり。又彼山変傷へせめて宵潰れ魂消
 要時ハ氣息もあはれ校枝ホ大く驚駭ぞ枕方より後方より抱
 うつ只音は喚活き声も吾侪も驚き走りぬ湯液を勧めぬ
 勲程もあはれぬなり。あはれもあはれも物も召し絶え
 五月雨の濕りぬ袖朽く檐の玉水音は果敢てあはれ
 心の中ハ神仏の擁護を祈りぬ。痛きは夕限りぬ
 赴はる多賀殿の入堂中の沙汰も細しと知りぬ。と受
 守をあげく苗守を老僕小廝に任し陸奥より飼立する栗毛の駒

ついで只一夜は彼地は到りて折しり。小袋坂の新関へまゝ城戸を毀捨て
 番兵退たぬとぞえし。聊障もとぬく馬を勸めく鶴岡多八幡宮へ詣りて
 多賀殿の厄難消除を黙禱して退け。既中々日ハ暮らりその宵ハ市に
 宿りて投りて巷説をうち笑く。多賀殿ハやうな禁獄より脱れ。和田義盛
 卿ハ領けられ。吉見殿ハ云云ともの大く。知多の目今和主の報れ。精細
 多類はあつたれば。彼下河邊高吉も逢ふ。一雨日逗留せ。便りも
 とつた。ばやと。あつた。姫ハ病著も亦心はなれば。次の日馬を乗父と帰郷
 せ。まの。あつた。留守と仕。老僕小厮ハ耳怕くと連累せられた。と
 あつた。某が。ぬ程は皆悉逐電。婢女輩ハその父母の病著をいひ
 身。暇を乞ひ。僅に残り。苗の校枝一人はかり。只是不便の
 の。且見姫ハ多賀殿の禁獄より脱れ。云云と風聞をよ。憑り

り。み。あつた。命。恙。素。元。罪。遠
 け。釋。あ。あ。相。譚。必。慰。昨。面。色。ひ
 け。公。取。草。身。起。て。飯。此。一。食。あり。斯。人。寡。折。あ。は。微。た。も
 冠。者。和。主。と。あ。へ。寄。る。大。さ。ぬ。資。之。況。姫。人。の。消。息。と。商。り。て
 件。の。物。語。を。あ。倉。公。華。陀。の。療。治。お。す。心。地。清。く。あ。を。あ。ん。噫。れ
 あり。鈍。や。の。要。時。憂。ひ。と。減。ん。と。長。禪。は。時。を。移。ぬ。姫。人。の。消。息。と
 又。せ。あ。又。相。譚。ん。長。途。の。疲。勞。さ。を。あ。の。足。踏。伸。し。て。休。む。と。懇。小
 歎。待。し。て。二。通。の。書。状。を。携。り。て。俣。奥。が。え。起。死。と。俟。と。稍。久。く。守。直。ハ。退。死
 き。ま。つ。と。の。あ。つ。消。息。ハ。要。時。も。苗。の。吉。見。殿。の。二。通。あ。り。且。見。姫。は。も。あ。め
 ら。せ。和。主。の。口。状。送。り。あ。彼。さ。の。の。の。趣。曲。は。傳。へ。あ。せ。あ。姫。人。ハ。勿。地。か
 つ。あ。ん。物。の。い。果。敢。し。あ。只。是。冠。者。御。夫。婦。の。あ。浅。く。あ。惠。ふ。と

兩三日を狂程に有る一日、蒙二郎の守直より、あつ海道からぬ鎌倉の
 風直も、尔後のより、安んじ、僕彼処に赴けり、あつは、街於欄説と定めて、
 其の来たる四五日、程身の暇を賜へり、守直、笑まされば、これ亦そのあつは、
 わたし、あつは、姫人あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、
 彼処へ邁く、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、
 そが、依り、蒙二郎と誘引立、奥の、あつは、あつは、あつは、あつは、
 ほろり、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、
 つま、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、
 丈夫の、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、
 かと、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、
 妾、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、
 夫、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、

守直
 蒙二郎
 風直
 彼処
 そが
 ほろり
 つま
 丈夫
 かと
 妾
 夫

ええり、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、
 妾、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、
 侍、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、
 漸、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、
 物、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、
 其、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、
 恙、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、
 領、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、
 違、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、
 ね、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、
 の、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、あつは、

あつは

中より刃を隠し人の知らぬ掃りてし況よりは密に秘婦人の秘密を委の
 〇け 〇毛を吹くを疵を求るんが了簡及びびく一且く必ひ止りてといれて
 〇をり落る涙を拭ひぬるやん 〇蒙二郎は後方より守直が袂を引て事
 〇あつ執りて多に怒りあつたれど又功をたしと浅きもの僕をどか助言よ
 〇似て鳥餅がゆく痛くおれんと且試は打せし角のくく措て校枝あ
 〇状をり今宵僕は逸与更然ハ明曉も立く鎌倉へ赴ん校枝とあ使と
 〇稱さば和田の第へ出入りしを究竟の便宜よりやその成らばとも此の
 〇殿の安否を考らんかそハハハと真実をいふも相譚へ守直八且く按て
 〇莞尔と笑和主の尋思大にあり考るばつ尺素とてあつて後回翰を
 〇んく又考て彼兒像見と遣されお失かんとし彼処は赴くとも人毎に
 〇用ひく叔母はもあれ外人は太田の郷より来たつた必しもいふべしと諭せ
 〇

長盛

〇心くそ肝要の事わたり又その文も肝要なれよく緩急と微笑は校枝を
 〇着て立んとし守直急なるをてその叔母のより彼処の事を知り彼と向糾
 〇ま子紛れあつたあつたれが商量既し整ひぬ且見姫歡びく文の綴る云を
 〇校枝はあつたをぬきぬれ物整んと遠くあつた部屋を退りてされば校枝へ
 〇且見姫の誨の随はるの文とあつたやや写す土産も些一裏添う一紙を甲夜の
 〇間蒙二郎は遞与し蒙二郎八時をもち時六月の上澣翠天涼し宛星
 〇月夜鎌倉をこり起つて只管急ぐ程は僅に二日半ゆく若宮巷路の東あり
 〇和田義盛の第は着ぬ且くそのゆるゆる尻掛酒肆は立ちて飲食は酒客が
 〇雑然と側聞はるも方々の噂は心かたさるものなれは遠くは
 〇後門より進み入るやと百五六十歩あり中門ありゆるゆる其処より入る前
 〇園門より一枚九尺の檜戸を立てるその戸は又樞戸ありその前つては板席し

右邊（りて）まゝの守屋（まもり）あり番卒（ばんそつ）二人飲（のむ）なり件（けん）の板間（いたま）の框際（かまきり）よりみみち
 土間（つちま）ありを母屋（ははや）孫（まご）相（あひま）なり附（つ）くある大（おほ）に櫃（く）戸（こ）二枚ありこれを左右（さやう）へ開（ひら）たう
 板席（いたせき）のほり大（おほ）燕脂（えんじ）白粉（びやくほん）搦（の）并（びやう）と鬻（ゆ）ぐもの物（もの）の本（ほん）と貸（か）て世渡（よわた）りたる高麗（こうらい）
 物（もの）彩色（さいしき）繪團扇（えだんせん）など鬻（ゆ）ぐもの呉服（ごふく）太織（たいお）の絹（ぬい）と鬻（ゆ）ぐもの多くの商人（しやうじん）ホ所（ところ）
 扱（あ）たはる聚合（くわがく）する小局（せうきよ）方（かた）多（おほ）功（こう）め女（に）子（こ）共（とも）幾（いく）人（にん）う参（まゐ）入り或（ある）ハ三（さん）の櫃（く）戸（こ）ありをさう
 真白（まはく）の半面（はんめん）とわらへく潜（かづ）る物（もの）ありと飲（のむ）著（あ）く蠅（あは）のどく商物（しやうぶつ）の重櫃（じゆうく）
 小葛（せうが）篋（けつ）のわらう立て母（はは）のが物（もの）を買（か）り或（ある）ハ主（ぬし）の使（つか）とさけあつるあはれん
 上総（じやうそう）木綿（もめん）の卓衣（たかえ）被（ひ）て右（みぎ）も左（ひだり）も萌葱（もそう）此（こゝ）太（おほ）や勿（な）切（き）幾（いく）重（じゆう）や焼（や）け締（ひ）む草（くさ）
 書匣（しよげ）と携（た）左（ひだり）も青張（せいぢやう）の日傘（ひがさ）と引提（ひきて）つ遽（は）げはどく邁（ま）りあり或（ある）ハ鹿（か）
 拷（かう）の前（まえ）禪（ぜん）と精悍（せい）けは端打（たん）る女（に）の子（こ）此（こゝ）一（ひと）依（よ）の茂（も）と四五束（四五たば）の薪（き）とつと
 輕（かろ）やに左右（さう）のま引提（ひきて）く内（うち）は入（い）り又（また）耦（あ）りて擔（か）ぐありたり現（げん）この館（くわん）の

あー和田（わだ）左衛門（ざゑもん）尉（ゑい）義盛（ぎせい）ハ鎌倉（かまがら）創業（くわんぎやう）の功臣（くわんじん）中（ちゆう）くこの米地（まいぢ）ハ信濃（しんぬう）あり又
 相模（さうも）ありむ且（また）侍所（じやくしよ）の別當（べつたう）が自然（じぜん）ハ華（け）や元（げん）采（さい）らるその威福（ゐふく）侍（じやく）多（おほ）るべくも
 あぬと小家（せうけ）これとさく美（み）之（の）大姓（だいじやう）ハこれとさく娟（けん）とさく大（おほ）一（ひと）況（けい）都會（くわい）馳（ち）
 田舎（いんが）見（み）ハ朱門（しゆもん）白壁（びやくへき）の目（め）輝（か）地（ぢ）瓦（わ）牆（か）石（いし）梵（ぼん）の足（あし）垣（かき）をさく紫微（しゐい）玉（ぎよく）殿（でん）入り
 飲（のむ）怪（かい）之（の）閨閣（きんかく）後堂（ごたう）の欄干（らんかん）を填城霞被（てんじやうせき）の嬋娟（せんけん）らる値（ぢ）てハ女國（に）薨（かう）農（のう）遊（ゆう）ぎ
 飲（のむ）と疑（ぎ）ありるべし蒙（もう）三郎（さんらう）ハの光景（ひかりがた）は呆（おろ）もさくあはれぬ入（い）り且（また）く外面（ぐわんめん）は立
 在（あ）り商人（しやうじん）ハ退（たい）れ去（さ）り婦女（ふにょ）輩（たい）もさく此（こゝ）あり折（せ）をまをし進（しん）とさくおさく呼（よ）向（むか）
 裡（うち）向（むか）より老（らう）さう執（しやく）接（せつ）人（にん）立（た）きくもの来（き）つと問（と）糾（きう）ハ又（また）その裏（うら）の刺（さ）をさくわ頂（ちやう）
 つ受（う）とく霎（しやく）時（じ）もあぬとひきくゆび裡（うち）面（めん）を入りたるかくて又（また）蒙（もう）三郎（さんらう）ハ僕（やく）
 と一時（ひととき）あありめさ此（こゝ）度（た）ハ色（いろ）と黒（くろ）く肥（ひ）脂（じ）つたる女（に）の子（こ）守（し）戸（こ）が報（ほう）商（しやう）とさく
 せりあは彼局（かきよ）は使（つか）と炊（く）妾（せ）ありて蒙（もう）三郎（さんらう）とさく武藏（ぶざう）ありの使（つか）あ

態はあつく無異と祝しや蒙二郎は遠く汗を拭ひ足と洗ひ校枝守房
 回翰を袂包と違与よかん校枝はうく歡びく途の疲勞のあえられども
 姫へのほり入事りて彼処の事の趣を口親おもういふと他はあくのいへば
 ありとゆるくいと奥に赴けり和田義盛の第の光景富貴繁華の為
 体又彼回翰とよりゆる輝の趣はさるる霍乱し心かきけも淡谷の郷は
 三日逗留せし事曲を報へば且見姫はうもあまき且然び且勞ひ校枝に
 累の封を解く文と讀みてはあまき立野紙をうも累ひく走書あまきりん
 老筆かれども美しく初に校枝が恙を祝しと異かたを報絶え久し死情を
 述べ訪れと執事すり扱次の條はまもこは近し多賀殿の元由縁の方
 ぶあは恰事をあを飲りて云云と相譚れり秘するもまきそのあををぬり
 姨へ幸ひは彼君の冊をそと隸られればえ臂近くゆりてま外ハ男の童二人を

守御の兵をいハ置れぬあまき一あは彼君の功高な似けるあまきよ
 罪かれはあまきいと惜まき憐れまき此の殿の心ちあまきをあまきかれは
 障りあまきもあまきと何のゆりもあまきけりてあまきあまきあまきあまき
 あまきあまきこれのゆりもあまき一校枝刀祢守戸の局と署うあまきの未だ
 物あまきあまきあまきあまきあまきあまきあまきあまきあまきあまき
 器うのの料もあまきあまきあまきあまきあまきあまきあまきあまきあまき
 えるあまきの一箇を美麗を乾果子あり一箇ハ糟漬の鮑ありは俸既か
 かくのどくあまきあまき且見姫の歡びはあまき守直校枝ハ蒙二郎と右左あり尉地
 立つ皆是和主の働地とまきあまきあまきあまきあまきあまきあまきあまき
 倉へ邁人と議はあまきあまきあまきあまきあまきあまきあまきあまきあまき
 病後のあまきあまきあまきあまきあまきあまきあまきあまきあまきあまき

藁二郎ハ顔リ進ム寸善尺魔と俗申シク疲勞を厭ク時後れば障
申クハハ顔リ進ム寸善尺魔と俗申シク疲勞を厭ク時後れば障
申クハハ顔リ進ム寸善尺魔と俗申シク疲勞を厭ク時後れば障
申クハハ顔リ進ム寸善尺魔と俗申シク疲勞を厭ク時後れば障
申クハハ顔リ進ム寸善尺魔と俗申シク疲勞を厭ク時後れば障
申クハハ顔リ進ム寸善尺魔と俗申シク疲勞を厭ク時後れば障
申クハハ顔リ進ム寸善尺魔と俗申シク疲勞を厭ク時後れば障
申クハハ顔リ進ム寸善尺魔と俗申シク疲勞を厭ク時後れば障
申クハハ顔リ進ム寸善尺魔と俗申シク疲勞を厭ク時後れば障
申クハハ顔リ進ム寸善尺魔と俗申シク疲勞を厭ク時後れば障

引チて夫ハ倅 諮ル夏野の鹿の筆も夏毛の長文ハ必死別とあり紙書集々
憂也多ク契リしハ仇と云ふ人とうん麻衣のあまは好むところ落涙増
せ碗の水も黒ハの兒の脚机走らぬ筆に時移りぬ稍一通と写果て像見の
肩もろ共封封菴ゆる程は校枝も亦叔母へ贈る尺素写せぬと云はれ且見姫ハこれ
彼と云ふはあつてハ重封皮として表箋ハ校枝がまけと云と署べるとく硯を
そかくへ推向へハ校枝ハ筆を引て写果てて封一封をわけて拉んとあつて忽
地は跪起これのそくハ物足ぬぞ贈りぬ何れか問れば沈吟ハ菴居の
折あるを愁は物を進せんハ郎の事あらむにわらうか世は憚の関もあればと云又
折あるを愁は物を進せんハ郎の事あらむにわらうか世は憚の関もあればと云又
折あるを愁は物を進せんハ郎の事あらむにわらうか世は憚の関もあればと云又
折あるを愁は物を進せんハ郎の事あらむにわらうか世は憚の関もあればと云又
折あるを愁は物を進せんハ郎の事あらむにわらうか世は憚の関もあればと云又
折あるを愁は物を進せんハ郎の事あらむにわらうか世は憚の関もあればと云又
折あるを愁は物を進せんハ郎の事あらむにわらうか世は憚の関もあればと云又
折あるを愁は物を進せんハ郎の事あらむにわらうか世は憚の関もあればと云又
折あるを愁は物を進せんハ郎の事あらむにわらうか世は憚の関もあればと云又
折あるを愁は物を進せんハ郎の事あらむにわらうか世は憚の関もあればと云又
折あるを愁は物を進せんハ郎の事あらむにわらうか世は憚の関もあればと云又
折あるを愁は物を進せんハ郎の事あらむにわらうか世は憚の関もあればと云又
折あるを愁は物を進せんハ郎の事あらむにわらうか世は憚の関もあればと云又
折あるを愁は物を進せんハ郎の事あらむにわらうか世は憚の関もあればと云又

人家の字を或ハ川口とも唱へ高野ともバカス。これのうらみは父君もさうか
 らひいと夏毎の二用ハ彼高野の里人ハ新玉川を網せし鯨を進らせむと
 あり今茲ハ家尊の大人もあまひの伏ハか得鎌倉に拘れてとりおせし書
 忘れぬ里人ホが此の鯨を饋しつゝ飯鮮もとて壓せし昨日の夕方此の
 鮮ハ二十日あまりを徑くのは熟ハ常の夕方れども此度の鮮ハ早漬ハ五六
 日より先守戸の局へ送り物ハ彼鮮ハ何うおんといはれり授枝ハ膝搦進め
 りあてぬら方を用ひせむハ真加あまり毛がべし妻が叔母とあれは新玉川
 之網は鯨ハあらのそらの名物ハを殿も豫てせむ鯨の鮮ハ最
 大好まきまめあれが細小の器ハ藏りて此度進らせむし之餘ハ一器と守戸
 へ賜りあらむらうの物齎せしとて障りゆべと他もあく勸ゆる心標
 伴れて推辞べしあはれがさくと鮎く別紙ハ云と書添えハ授枝ハ清磁

器をこれ彼と擇むを洗拭く桶ハ鮮を移してを俵に
 姫ハ副翰を件の器ハ共ハ萌をさう紫の服紗に包んで
 程ハ授枝ハ之餘の器ハ鮮を移し推包む主従の饋物と外函被り袱又
 包とをさうこの日ハ暮暮よりその夜ハ且見姫ハ景三郎を召近つて
 守戸へ饋し一果と授枝ハと遞与すあまひの恥くあり饋物の鮮ハ
 あり一五五のひあはれ彼処へ邁ての夕と云と云えあハ景三郎ハあはれ
 次具曉ハ饋物と背負つ守直ハ辭し別れ又鎌倉へと起程するあはれ勇
 あればあハ先度より疾走りつゝ日夫口の渡えりあはれ前向の人家ハ宿投り
 次の日ハ又曉より遠く旅宿をせむ只管ハ走る程ハ未牌あはれ人とあはれ善宮
 巷路ハを承みなり案内知るあはれ目も躊躇せ和田義盛の第ハ後
 進ハ入る閨門ハ赴くハ彼樞戸のやうハ執接人ハあはれ人葛の袴を著し

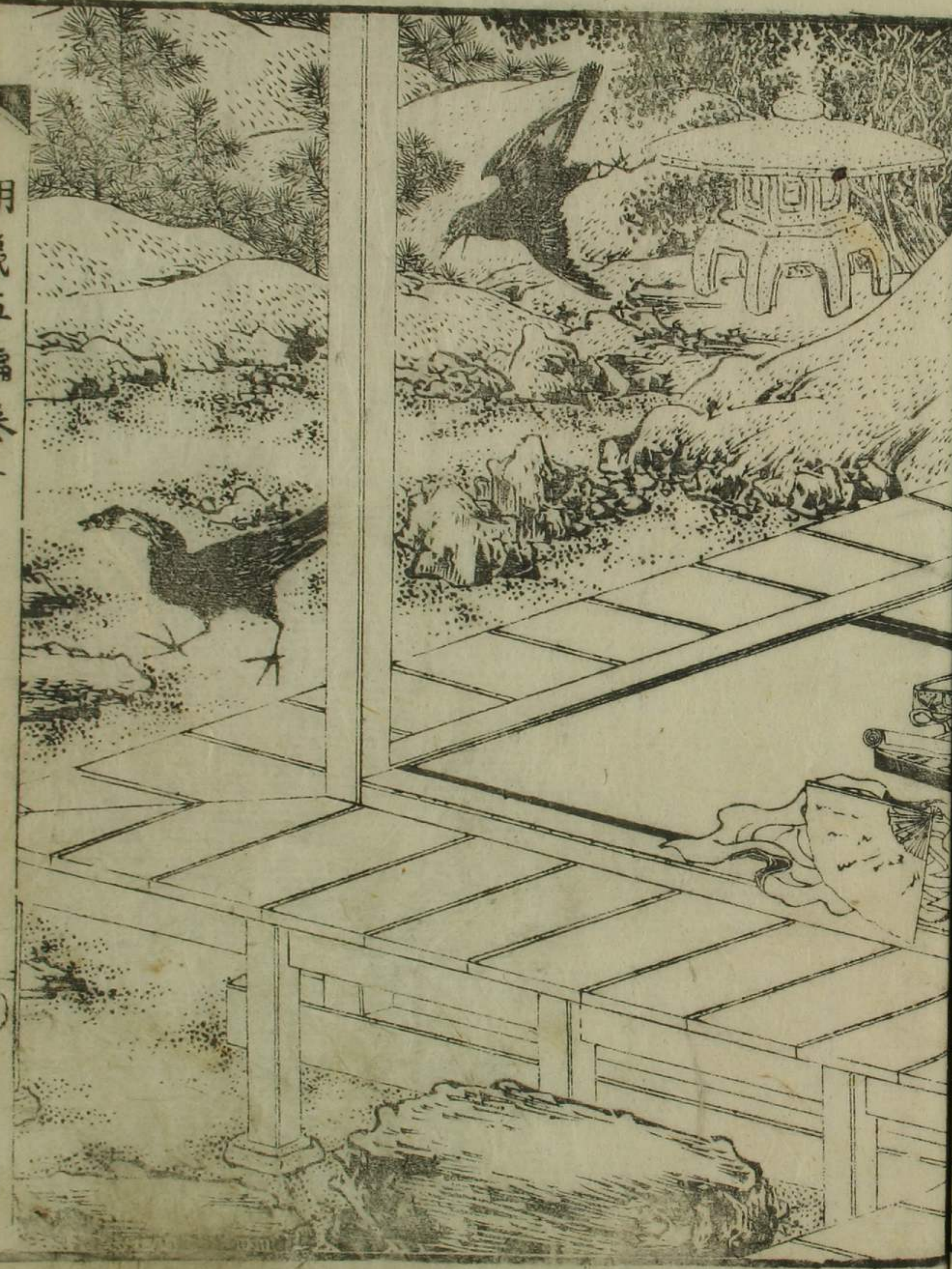


の只一個出てをり曩日見らる老人かたねと商人かたねも来聚ひばほり近く走り進ま
 執接人より對ひ卒かたね物あつて僕ハ使のよと守戸の局へこの一包をあおと
 ぬひひりおたどくへ人傳かたね届ぬひねと頼まきまき携る祇包を恭しくおたね
 執接人へ心といへく刺さるふふくく讀みえ訝しげな面色しつて要時あ
 ねと被て包を引提く奥入りぬかきしつて藁三郎ハ疲勞れし足を休めを柵
 尻を掛されど守戸が回翰をいもぬ心有繫まおつて尻入の出入者毎件の
 回書といへきつて尻と尻と外へ迎えられぬあつて尻入と外へやう候と一時を
 のり件の執接人よりあつて祇包といへは藁三郎の返しくりやう和主のつれり
 来ておれ御館とせらるやんあまの女中ハ多う中ハ折戸と喚せぬおれ守戸の
 局といへや名の違へあやわんと彼を答へ問へどもかき名の婦女子あり訪
 めらわらぬをよりこの一包ハ封の終遠はとて去ねといへば藁三郎ハを

〇云云と頼まきしつてあつて告て渠かたね姪のうりも回報せし趣を長久又
 〇あつて渠復使といへ太田の郷より姫入の兒消息を寄せたり折戸四下に
 守り入られが届ぬひりよんをかりとえんと賜れりと眞実しげ且見
 姫の消息と服紗包といへは光仲の氣色もぬく寔は女子の浅くぬる
 〇あつて渠復使といへ罪蒙りといへ知りぬる世といへも憚るる所なりと
 〇久且見おれとされかたね守直これを知りしつて禁む死るるあつてあつて
 〇あつて渠復使といへや局且見姫は使へ校枝がぬり叔母あつて款亦是不思儀の
 宿縁之輒く渠と相譚れくこれの執接せしつてあつてあつてあつてあつて
 〇あつて渠復使といへ光仲の期よ及び女子あつてあつてあつてあつてあつて
 贈授せしつて人よいりあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 他よりあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

いそぐれ親は許され君や知られ夫婦送は安否を問ふを誰う正事と
 つのの侍ん姥のものをあやう扇履は義盛といれりあり彼殿の側隠
 和君もあせあひけりやあゆみの人い知事も主従一致のうへればいぞう他所へ
 洩れ侍んぢん父君は捨られくこの伏の君の安くぬと遣は想像りせり眞
 さぬのあまろを推量りく痛お痺と武士のあれど心つめんあどあん
 おう消息とをそあぐ一筆かりも見せとあつて今ゆふ詐欺りあはと
 彼方にもは姥の恨のれやせん狂くろの後と聴くと若語棚多料紙硯と
 せと取勢しとせゆる老女の城は光仲ハ己とせぬぞ點頭バ守戸あつた
 ちつバ姥も局へ退りく校枝へ回翰写めん急せと眞実とく潜ゆるあど
 退りかかしく光仲ハ且見姫の消息と封推折と披記るふ廣綱の像見
 角と中は包とそく憂をいんと書つり筆に涙の迹をそる第一條への

角はく官府のめん疑いとせりしとれあんとと杓りはと書り次ハ葉二郎が
 校枝がゆその忠との義と稱へり又その次ハ廣綱の世とあり捨り別れのあ
 一と考と貞と一色紙は盡ぬ歎たといはえよ若井は清如水莖の深き
 せのいとあつたふ汲とくあつた弥あつた件の尺素と巻むる服紗色を解
 披記くとの副翰と取く續むふ高野の里人ホグ今茲も鯨を饋りたり
 せと飯鮮はあつとと嗜まをぬ物なればと校枝が頻りハ勸めあひくあん
 笑ひは備へたりとこわいと短く書りける光仲ハ高野の里は名を
 ぶあひなつて新玉川の清は流れも深は妹があち中をとしてるは益と
 取てえろよその鮮の飯の色常よかりしやあつた眉うち鬚やうくも又た
 今の世の人心夫婦の親も憑かか初まれ守戸が云と告りしは原采の
 老女ようぬ心をさく扱くと且見が消息を偽りると試るあつたあんとあ



一
器の饋
もの皆老の
契りと疎く

光
仰

これバ田新せだ。あれれもその言の葉よとてまじも滅頭れ。疑せしく受をあ。
 披たぐ。これバ扮れも死尺素。且見がも蹟中。前司殿の自筆の歌あり。
 像見の扇と添れ。疑心くもあ。あふあれれもこの鮮の色異あ。ハ
 何と怪しやうとあ。あつと見え。折れ。忽地庭の松枝。一隻の鳥。朝来て。袖宿
 餌欲。の。数鳴。う。光伸。これと。迷。向上。て。せ。う。あ。ろ。は。領。だ。つ。硯。宮。の。力。子。を
 連。く。取。え。と。は。有。繫。小。寸。鉄。と。許。さ。び。細。や。う。の。筆。の。軸。懸。の。鮮。と
 突。幸。れ。く。三。四。つ。あ。れ。の。巻。石。の。邊。へ。撲。地。と。投。与。れ。バ。鳥。ハ。頭。と。傾。け。く。霎。時
 ぶ。や。や。中。く。飄。々。と。翔。降。の。四。下。と。見え。り。足。と。揃。へ。く。跳。ぶ。と。く。近。つ。た。く。
 件。の。鮮。と。横。ご。の。喙。と。衝。く。樹。上。あ。り。く。還。り。頻。り。ま。角。く。衝。摧。れ。て。忽。地。啖
 盡。は。と。え。し。鳥。ハ。声。亞。と。鳴。く。身。と。轉。り。て。樹。下。へ。墮。る。俛。て。死。す。り。光。伸。ハ
 この形迹。小。愕。然。と。し。く。う。ち。驚。れ。原。来。この鮮。を。毒。と。加。く。饋。と。これ。と。が

眼力の暨。は。偽。婦。の。為。子。害。せ。れ。ん。嗚。呼。危。れ。た。危。れ。た。現。せ。し。の。子。を
 生。と。も。婦。人。あ。あ。ろ。援。と。し。の。鄙。言。ハ。これ。中。も。あ。り。る。を。察。さ。る。小。且。見。姫。ハ。月
 あ。の。苗。守。の。程。密。夫。ハ。心。惑。わ。く。これ。と。鬱。悒。皆。あ。り。か。ハ。不。測。の。罪。業。り。て
 今。も。この。鎌。倉。ハ。箆。措。れ。れ。も。の。飽。は。遂。の。あ。ま。の。毒。と。り。害。く。後。や。を。く
 せ。が。を。計。り。し。疑。ひ。に。這。奴。憎。む。し。と。心。中。ハ。爪。弾。け。く。疾。視。詰。る。飯
 軒。ハ。途。ハ。人。も。小。ま。さ。れ。く。わ。り。あ。れ。と。夢。む。ご。も。あ。り。あ。れ。を。哀。れ。り。且。光。伸。ハ
 怒。と。飲。む。膝。立。直。し。噫。れ。れ。ろ。愚。痴。の。死。富。貴。ハ。他。人。も。聚。り。貪。賤。ハ。親
 族。離。れ。れ。存。亡。不。定。多。罪。人。と。多。り。あ。り。妻。子。中。も。疎。ま。今。何。も。亦。誰。し。と。知。ん
 緞。且。見。が。奸。夫。と。知。る。と。も。身。ハ。拘。れ。て。あ。ま。在。り。憎。し。と。い。ひ。も。何。と。う。後。き。且。見。が
 不。義。の。罪。重。く。も。前。司。殿。の。恩。義。ハ。高。く。も。れ。り。辛。く。脱。身。を。命。に。恙。を。く。も。あ。り。ハ
 舊。の。井。平。た。ん。の。と。夫。婦。の。縁。り。是。を。と。と。今。あ。り。離。別。の。状。と。取。り。て。披。怒。

歡せん嘻あやうと吐裏、あひくろ硯の海は立ちや筆の水零子心づくしうこ
 の泡とあやう又掃流に墨より薄た妹伏の中を裂かうく見の真葛野
 北山遠地紙屋帛の料紙はあれど且見姫の副翰の裏引くく要時
 業くくあやうと書ど贈れし之行幸は像見の扇巻筆器の鮮も舊の
 固く封とさう氣く樹柱のさまり暮初庭面とさう酔とさう
 程守戸の局ハ潜やふぬび来てのふおん奴ハハおれり秋暮ぬ程
 急れ侍りとあやう光仲領地と局の誠心黙止くく燧よ回書と遣せども
 再ハ要加記更この身人あられか局ハさう和田殿の名と立ちくとも
 あやうあちぬと警めく件の包と取られバ守戸ハあやう歡びくあ
 のいんとほるおの間のく不是然と足音はとええとさう兼燭の
 童守戸ハさうぬ面色く掩り餘、服紗物と袖は隠と遠くあやう

局へ退りて馬穿禍の倚り所推くその端とあやう原ふこの一條の
 錯誤ハ春鶯鳴泉との巢と換く落花流水のさうこれを知らぬ景三郎
 秘密の書札と時政の第ハく邁地遂は執接人は遞与せあやう折戸と侍見
 折枝が包ハ麓る刺は假若あやうと折戸のつがののしん人と書うりくとりと
 たりとあやう文字似れハ執接ハ誤認て懸て折戸は届けと折戸も亦疎忽あやう
 封を断包と披た後ハさう方へ贈れハあやうと曉りて悔くあやう
 御知に彼は禪ハ告てほく困果たさうと牧の方信はくさうとこれとさう
 疑かくあやう且見姫主後より光仲との冊の老女守戸へ贈状又廣樹の
 像見とさう扇巻筆器の鮮と添り牧の方ハ熟見マハ物獲りと
 歡びく竊ハ良人時政云と報てのさう彼井平の光仲奴ハ辛く獄舎を出
 られどもあやう拘りてさう妻よりさうと物を贈ハ大膽ハ今れとさう

此の妻とあるものぞ脱免彼奴ホ夫婦のそ夫侍ト年来媚くあひあふ
 要拘人義盛をこれをもと罪とて落さば稍目上の贅脱と心地あやふ
 これ商せとさしあはせバ時政ハ鼻紙盤を眼鏡を把く件々を見つ且尋
 思くあまの證據ありとのふとも定く流罪のめとあもその妻子の消息ハ
 許さく例もあり譬言バ今光仲ハその類ハあつたともこれハこそ創業ヲ補佐臣
 將軍の外戚ある婦人の密書を偷見と云云と計らる諸老臣ハ扱せられん
 況重忠能負ホハ光仲を具負めんとて子義時の肚裏も今さう小撈り
 だし渠りあふハ必禁めん又義盛ハ故老の大紳その族黨多クハ聊科を
 負はるとも一朝ハ仕しと就く謀ありとれとわら法とてん其刃を
 以せバ憎しとあふ光仲奴と今宵の中ハ殺さしその謀ハ箇様くと耳を
 引いてと示せバ牧の方感服しく歡を大く終る且見姫の副翰ある

その二番の鮎の中へと酷烈なる毒を加えとよ搦糝ありと舊のどく
 服紗子包を又折戸が纏て断折る封紙ハ似つら白紙をその尺素と封
 扇と巻蓄扱偽筆とよひつめその標署を写しは彷彿とてめれと
 真のつれと贋とをわたりかろく内外の重封皮も定く初は異ありと久
 一時むらむらと碎全く修復果と折戸もさう機密ハあつたさうと氣
 あらむらむらと汝が怨の傷痛さうも措れは苦心とてあつたさうと
 くれえと舊のどくめんかれはこれとてさる使の只云云といひてれと
 返せりあつたこの封と披れをどのやうも暖氣やもあつたさうと使が
 鉦く受りしむり去かバ又知らせよと己が伎倆を思ひ被けく眞実
 けふ分付れバ折戸ハのぞく歡せんあつたさうと要時ハ措け腕て件
 一包を引提て退れと執接人ハ云云といひてと蒙二郎返せと牧の方を

彼使が異後受て去りしと折戸が報ふ状が又時政告ふしがさかそ
 あり舌を吐く鼻笑の點頭も時政夫婦の奸計に既にかくの如くは
 離山のあはれも長唐櫃四箇をも光仲を罪に陥せし本人の知る
 奈何と撈ふべし。されば又蒙二郎は彼時只義盛の轉第せしもの
 舊第へ移りしもの時政の事を知らず。又且見姫の饋物に鮓の鮮
 心を後悔されし包も封も舊の如く異なるともわづれは遂に不
 欺れ。再これと携つて今巷路の義盛の第へと赴けり。されば光
 九庸のわづれを多く猜し。試みる害を避れし。是より疑ひ且見
 久は係より憐れ。薄命の貞婦徒に免を抱て憂苦を併ふ由り。叙
 蒙二郎太田の宿所へかゝり来て又甚摩の說話。吉田屋の事
 朝夷巡鳴記全傳第五編卷之三終

吉田屋

吉田屋

けふの見る人

毒物とてくま

名科

ほとこ

